



# 視覚障害者誘導用ブロック 整備基準



# 視覚障害者誘導用ブロック

## 主 旨

視覚障害者誘導用ブロックの整備に関する、統一化を図り、設計・施工に資することを目的とする。

## 整備基準

### 設置場所

視覚障がい者が多く利用する道路には、視覚障がい者の利便性の向上、かつ安全性を確保するため、適切に設置すること。(DID 区域内の道路幅員10m以上の道路。なお、DID 区域外は関係機関と協議すること。)

- (1) 歩道の巻込み部、横断歩道に接する部分、立体横断施設及び地下歩道の昇降口等で必要な部分に視覚障害者誘導用ブロックを設置する。
- (2) 視覚障がい者の利用の多い施設から、最寄りの公共交通機関まで、視覚障害者誘導用ブロックの設置に努める。

## 整備基準

### 材料

#### 1 種類

- (1) ブロックの種類は、点状ブロックと線状ブロックの2種類とする。
  - ア 点状ブロックは、点状の突起をその表面につけたブロックをいう。
  - イ 線状ブロックは、平行する線状の突起をその表面につけたブロックをいう。

#### 2 色彩

- (1) ブロックは、黄色とする。

#### 3 形状

- (1) 滑りにくくするために突起の頂部を平らにしたものとする。
- (2) 寸法は、300x300x60Hを標準とする。
- (3) JIS T9251 「視覚障害者誘導用ブロック等の突起の形状・寸法及びその配列」によるものとする。

#### 4 材質

- (1) 十分な強度を有し、歩行性、耐久性、耐摩耗性に優れたものを用いる。
- (2) JIS A5371 「プレキャスト無筋コンクリート製品」のカラー平板と同等品以上とする。
- (3) ロードヒーティング区間等のように、構造的にコンクリート製品の使用が困難な場合については、滑りにくく、つまづきにくい製品（貼り付けタイプ等）を使用してもよいものとする。この場合の材質については、摩耗しやすいもの、褪色しやすいもの、怪我の恐れがあるような硬く鋭い角をつくりやすいもの等は避けるものとする。

なお、貼り付けタイプの場合、はがれやずれが生じる恐れがあるため、材料にあった接着剤を使用するなど十分注意する必要がある。

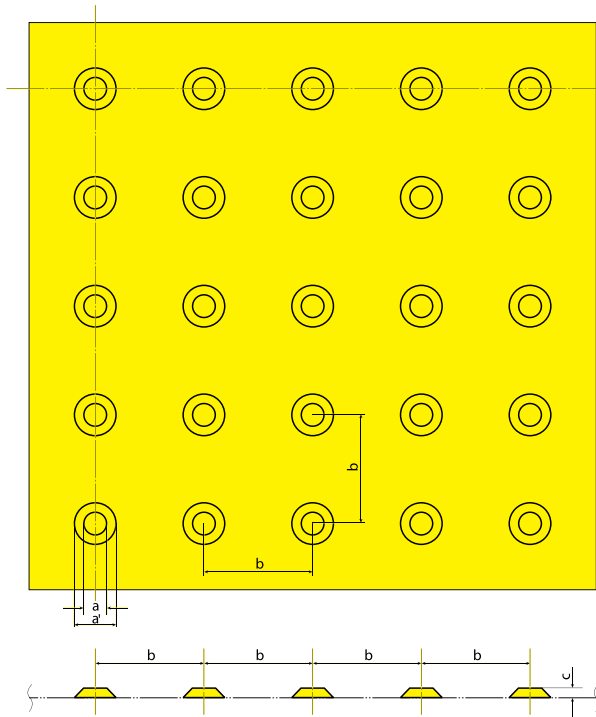
#### 関連法令

札幌市福祉のまちづくり条例

視覚障害者誘導用ブロック設置指針・同解説

## 札幌市仕様の視覚障害者誘導用ブロック

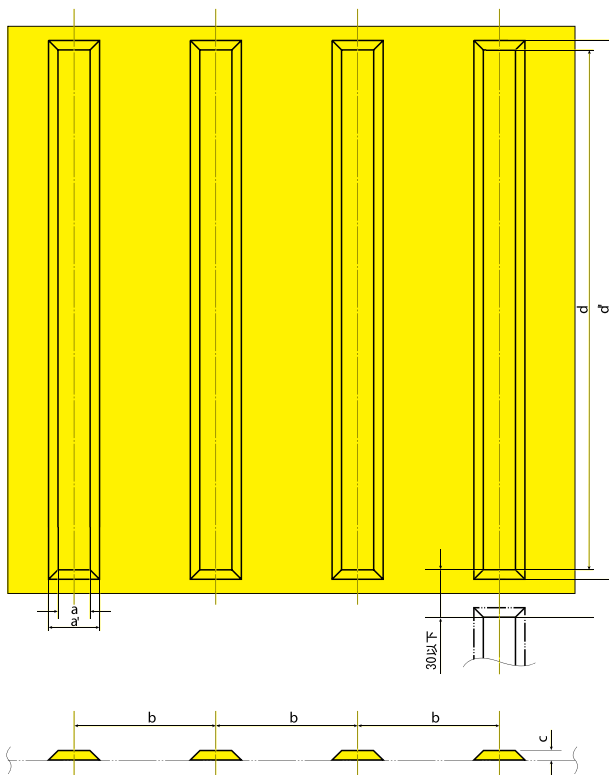
点状ブロック（位置表示用） $300 \times 300 \times 60H$  単位 mm



記号	寸法	許容差
a	12	+1.5 0
a'	a+10	
b	55~60*	
c	5	+1 0

注\* この寸歩範囲でブロック等の大きさに応じて一つの寸法を設定する。

線状ブロック（方向表示用） $300 \times 300 \times 60H$  単位 mm



記号	寸法	許容差
a	17	+1.5 0
a'	a+10	
b	75	
c	5	+1 0
d	270以上	
d'	d+10	

備考 ブロック等の継ぎ目部分(突起の長手方向)における突起と突起の上辺部での間隔は、30mm以下とする。

設置例に使用するブロックの凡例



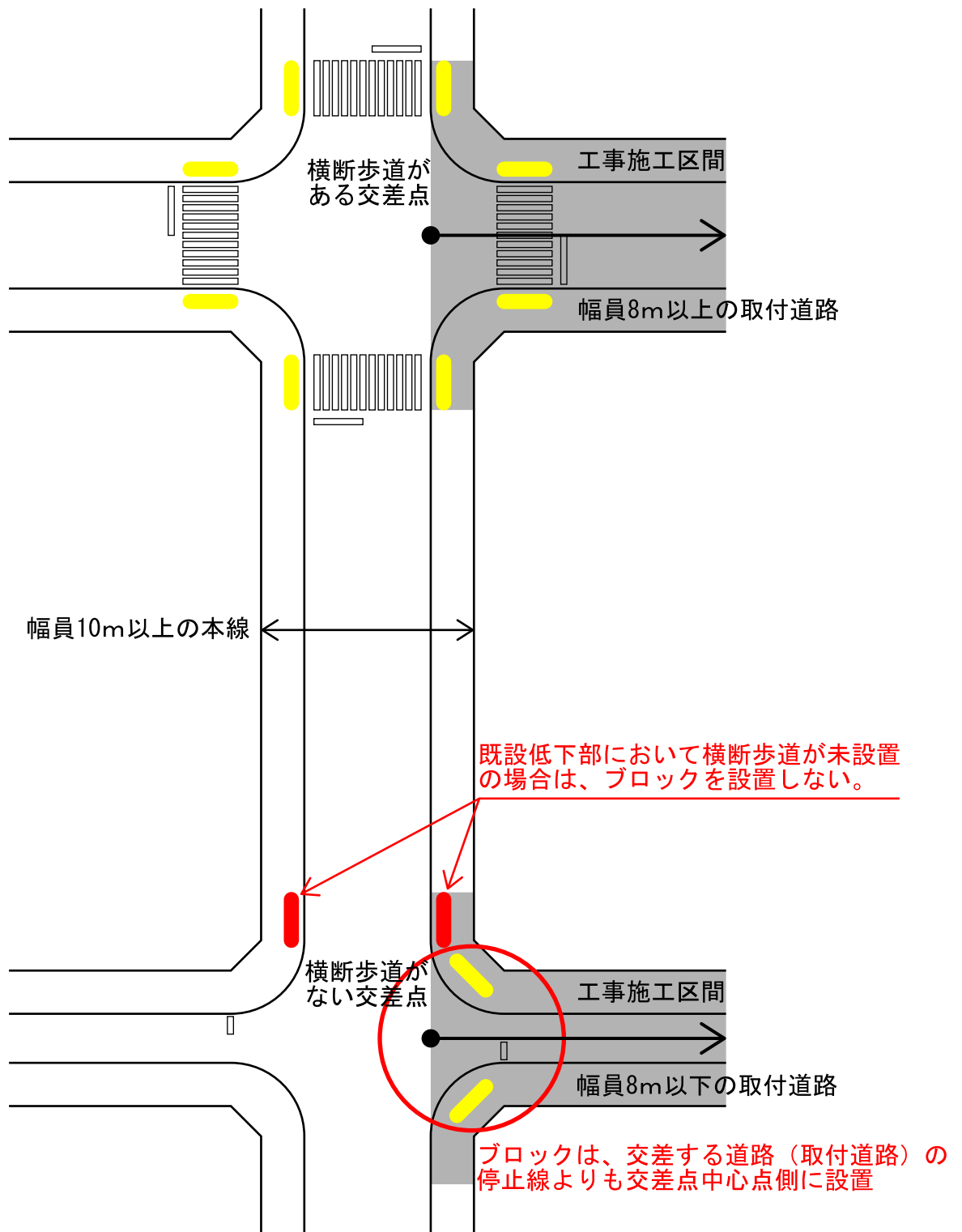
点状ブロック



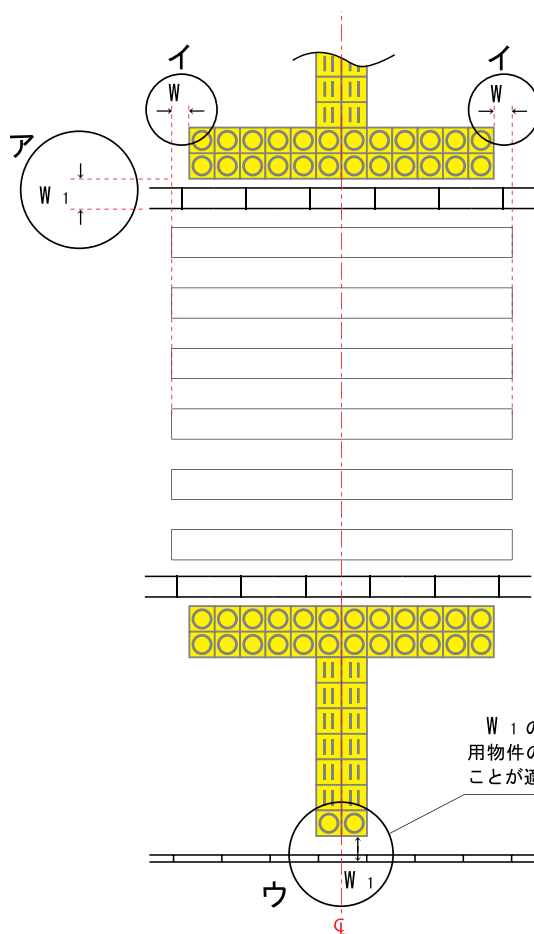
線状ブロック

## 交差点部の基本的な施工例

※D I D区域外については、関係機関と協議とする。



- (1) 原則として歩道（自転車歩行者道、立体横断施設、中央分離帯等を含む）上に設置する。
- (2) 点状ブロックは、主に注意すべき位置や誘導対象施設等の位置を案内する場合に用いる。
  - ア 横断歩道部においては、歩車道境界より30cm程度の位置に2列配置で横断歩道の中心から左右対称に設置する。
  - イ 横断歩道の幅員以内に設置する。
  - ウ 道路境界側においては、道路境界より30cm程度の位置に2枚設置する。
  - エ 歩行方向を変更する分岐点には、4枚設置する。

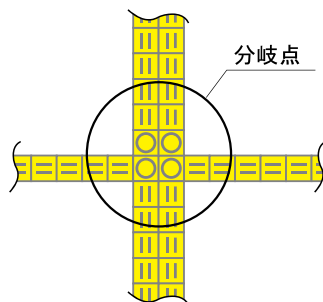


W : 30cm未満  
W 1 : 30cm程度

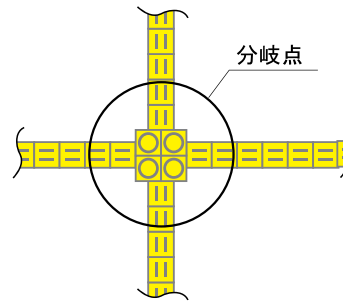
(注意) W 1は、歩車道境界においては、車両への接触を防止するための設置余裕幅であり、その他の場合においては、路面の変化による転倒などを防止するための設置余裕幅である。

W 1の道路境界側においては、路上施設や占用物件の設置状況などによって、この値とすることが適切でない場合は、この限りでない。

エ



2列の線状ブロックに交差する場合



1列の線状ブロックに交差する場合

関連法令

視覚障害者誘導用ブロック設置指針・同解説

(3) 線状ブロックは、主に誘導対象施設等の方向を案内する場合に用いる。

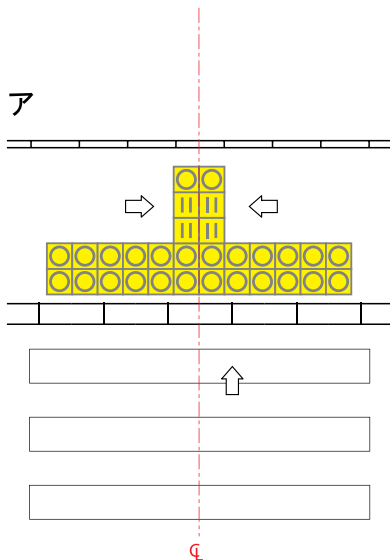
ア 横断歩道部においては、横断歩道の中心部を示し、横断歩道の方向と一致させる。

イ 継続的直線方向の誘導は、D I D区域内の歩道幅員が3.5m以上で交差点間を連続的に誘導する場合に行い、敷設位置は下表のとおりとする。ただし、電柱や植樹ます、道路境界にある塀や建物等の支障物からの離隔は60cm以上確保した上で、急激に屈曲させることがないように直線的に敷設するのが望ましい。

歩道の有効幅員	道路境界からの離隔
2.3m以上	1m程度
2.3m未満	60cm以上

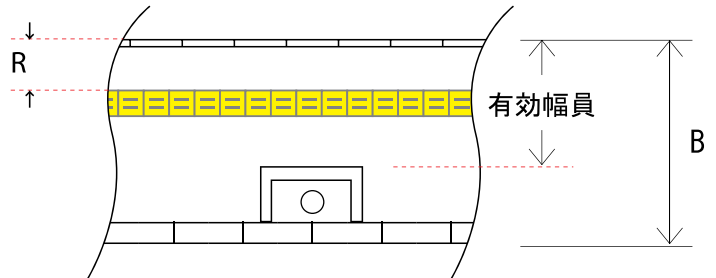
ウ 誘導経路上の屈折箇所の設置例

エ 屈折・屈曲部の  $a$  が10cm以下の場合の設置例



◀ 矢印：歩行方向

イ



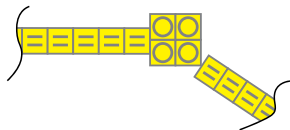
B : 3.5m以上(D I D区域内※)

R : 60cm程度(広幅員歩道では1m程度)

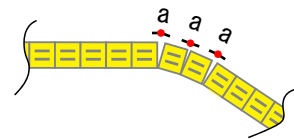
ただし、路上施設や占用物件の設置状況などによって、この値とすることが適切でない場合は、この限りでない。

※D I D区域(人口集中地区)：人口密度が1km<sup>2</sup>当たり約4,000人以上の地区が集合し、合計人口が5,000人以上の地域

ウ

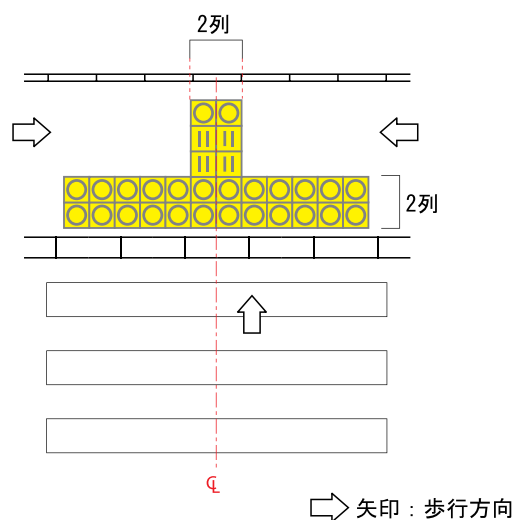


エ

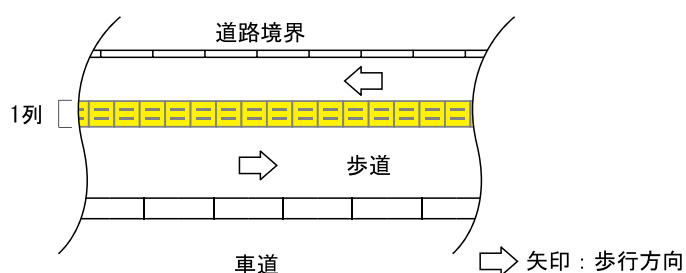


$a$ : 10cm以下とすることが望ましい。

- (4) 線状ブロック及び点状ブロックの設置場所に、はじめて踏み込むときの歩行方向に、60cm（2列）の幅で設置する。



- (5) 継続的直線歩行の案内を行う線状ブロックは、歩行方向に30cm（1列）の幅で設置する。



- (6) ブロックの設置個所に障害物がある場合で迂回不可能な場合、下記の優先順位 a、b、c、dに基づき設置する。

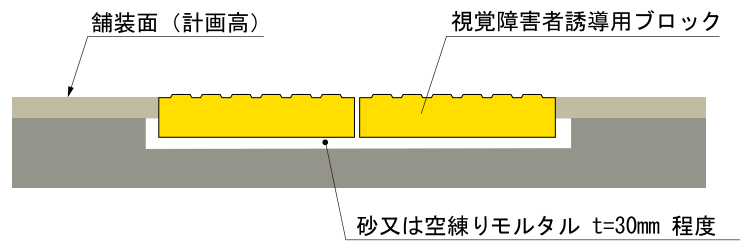
- a 障害物は可能な限り移動し、ブロックを設置する。
- b 「a」が不可能な場合、その部分を化粧蓋に変更し、ブロックを設置する。ただし、化粧蓋の設置が困難な場合は、貼り付けタイプを設置する。
- c 「a」「b」が不可能な場合は、障害物を除いて設置する。この場合、ブロックは10cm以上重ねて設置することとする。



関連法令

視覚障害者誘導用ブロック設置指針・同解説

## (7) 標準断面図



- (8) 線状ブロックは原則、隙間なく設置するが、隙間ができる場合には、製品を加工し、設置すること。
- (9) 一連で設置する場合は、同寸法、同材質のブロックを使用する。

## 整備基準

## 維持修繕

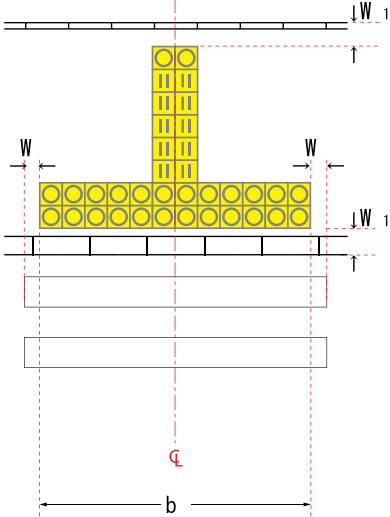
- (1) ブロックの異常（摩耗・破損等）を認めた場合には、すみやかに補修を行うものとする。なお、摩耗の目安としては、ブロックの凹面と凸面の差が、2mm以下とする。



基本的な設置例については、「視覚障害者誘導用ブロック設置指針・同解説」（発行 社団法人日本道路協会）より抜粋。また、現場の実状にあった不定形な設置例については、障がい者団体及び利用者の意見を取り入れた事例を掲載する。

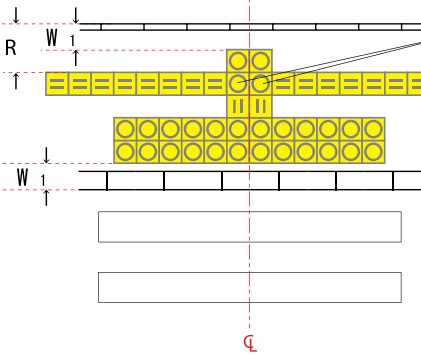
1 横断歩道部の設置例

### 基本設置例



W<sub>1</sub> : 30cm程度  
 W : 30cm未満となるまで  
 点状ブロックを敷設する。  
 b : 横断歩道の幅員以内とする。

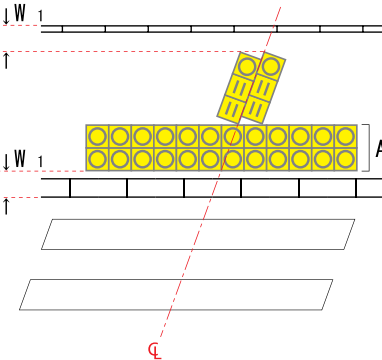
#### 継続的に直線方向を案内している場合



この部分を点状ブロックとし、分岐点であることを案内する。

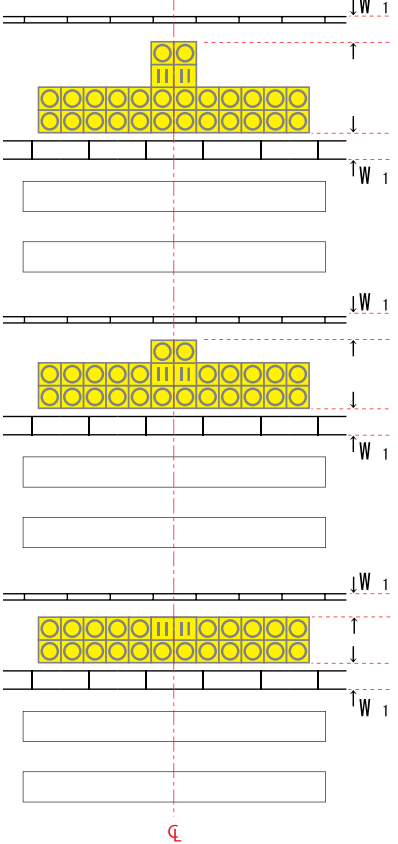
W<sub>1</sub> : 30cm程度  
 R : 60cm程度（ただし、路上施設や占用物件の設置状況などによって、この値とすることが適切でない場合は、この限りでない。）

#### 横断歩道が斜めの場合



W<sub>1</sub> : 30cm程度  
 (注意) 線状ブロックの方向は横断歩道の方向と一致させ横断先と一直線に設置すること。  
 ※A : 点状ブロックは、縁石と直角に設置する。

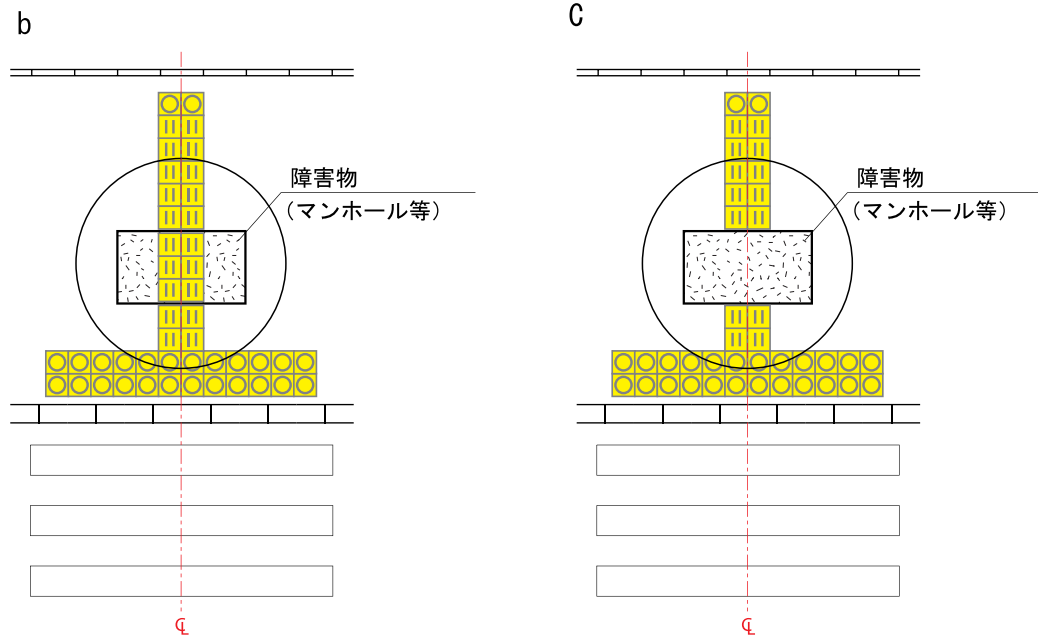
#### 歩道幅員が狭い場合



W<sub>1</sub> : 30cm程度  
 (注意) 線状ブロックで、横断歩道上の歩行方向及び横断歩道の中心部を案内することが望ましい。

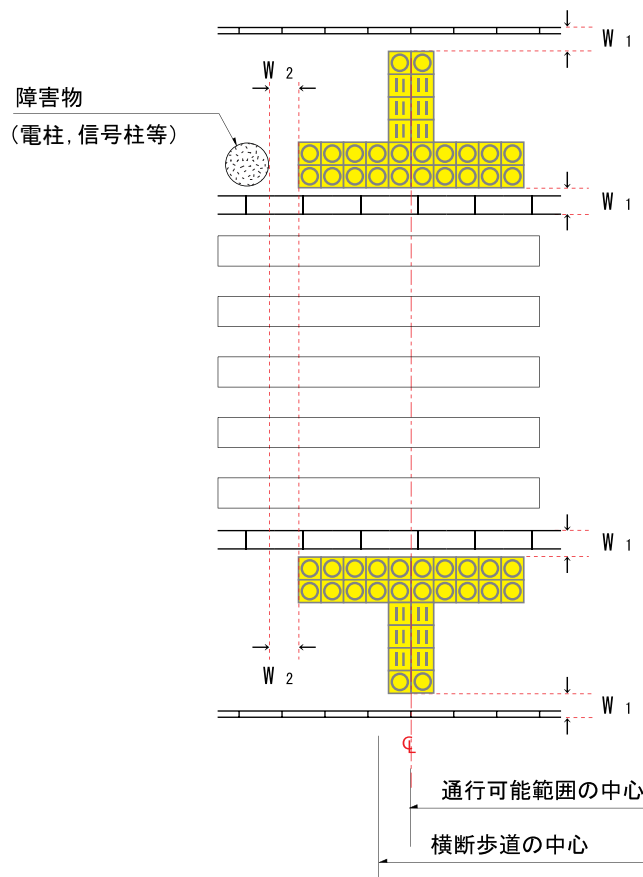
## 横断歩道部の不定形な設置例

- ア ブロックの設置箇所に障害物がある場合で迂回不可能な場合  
下記の優先順位a、b、cに基づき設置する。
- a 障害物は可能な限り移設し、ブロックを設置する。
  - b 「a」が不可能な場合、その部分を化粧蓋に変更し、ブロックを設置する。  
ただし、化粧蓋の設置が困難な場合は、貼り付けタイプを設置する（円形蓋を除く）。
  - c 「a」「b」が不可能な場合は、暫定措置として障害物を除いて設置する。しかし、この設置状態は決して適切な敷設方法ではないため、占有者に対しては「a」「b」の方法で協議を継続すること。



(注意) 「c」の対応策は完成形ではない。

イ 横断歩道の範囲内に障害物がある場合  
 接近しない方が好ましい障害物から離して設置することが、望ましい。



W 1: 30cm程度  
 W 2: 30~60cm程度  
 (注意) W 2は、歩行上、接近しない方が好ましい構造物等への接触を防止するための設置余裕幅である。



施工前

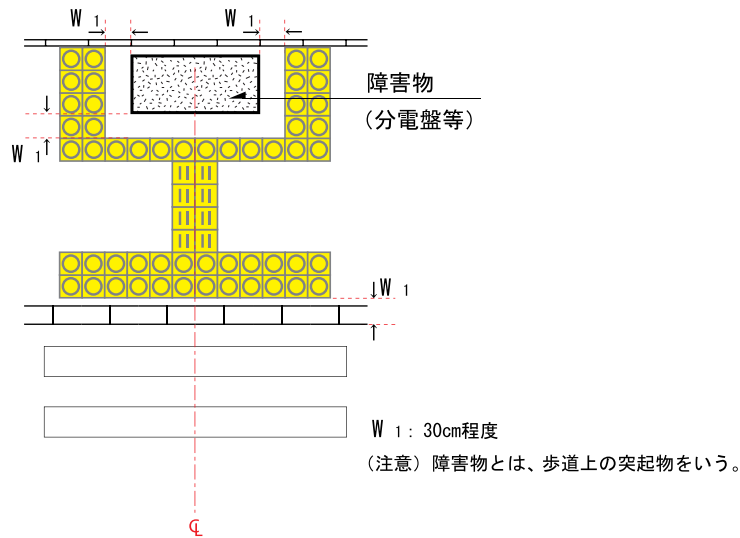


施工後

関連法令

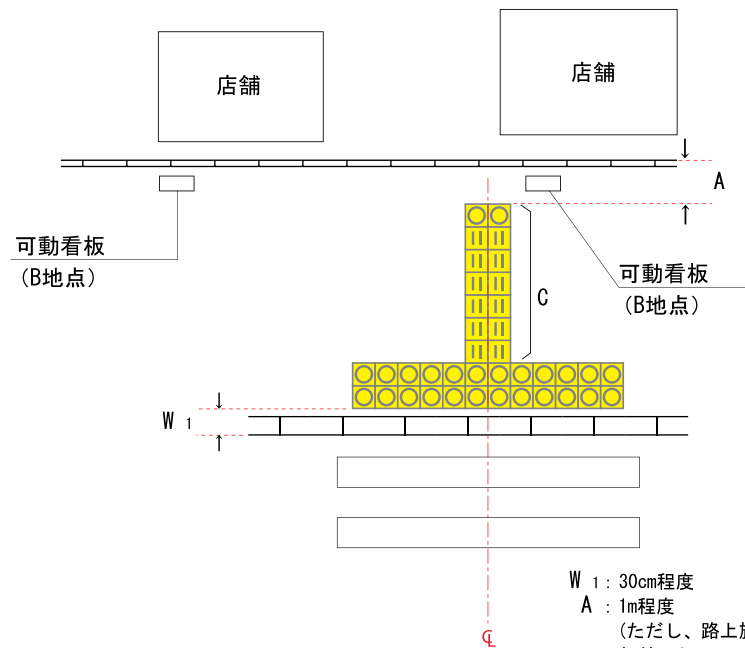
視覚障害者誘導用ブロック設置指針・同解説

- ウ ブロックの設置箇所に障害物がある場合  
障がい者に注意を促す措置をとることが望ましい。



- エ 道路占用許可を受けている可動看板がある場合

視覚障害者誘導用ブロックを設置する場合は、その周辺の状況を把握し、設置位置を決定する。

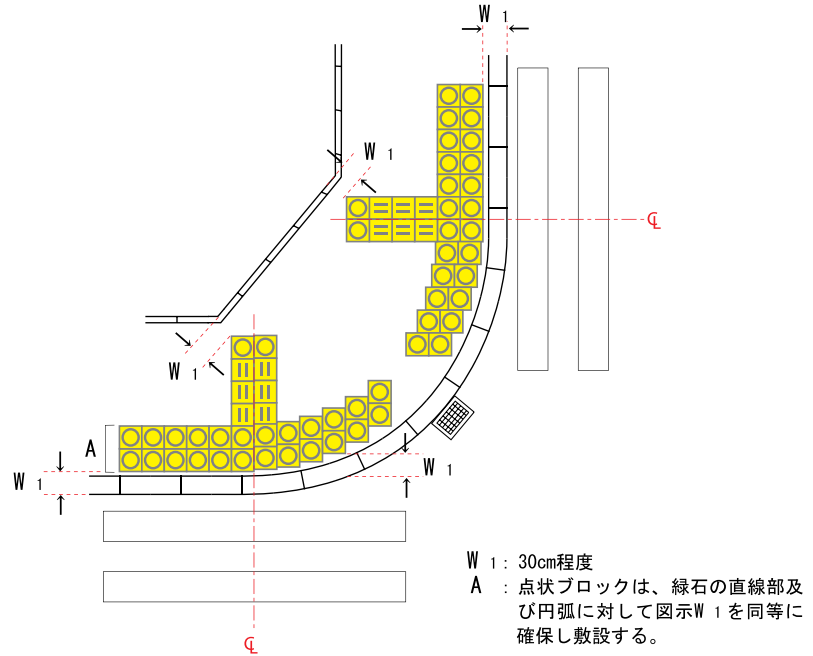


- (注意1) 特に市街地中心部及び商店街等に注意する。  
(注意2) B地点に常時可動看板がある場合等、周辺の状況を把握することとし、利用者が看板等に接触しない様に、視覚障害者誘導用ブロックの設置(C)に、配慮すること。  
(注意3) 可動看板の占用場所は道路占用の許可基準より「店舗前の道路境界から0.7m以下とし、交通に支障のある場所に設置することはできない」と定めている。

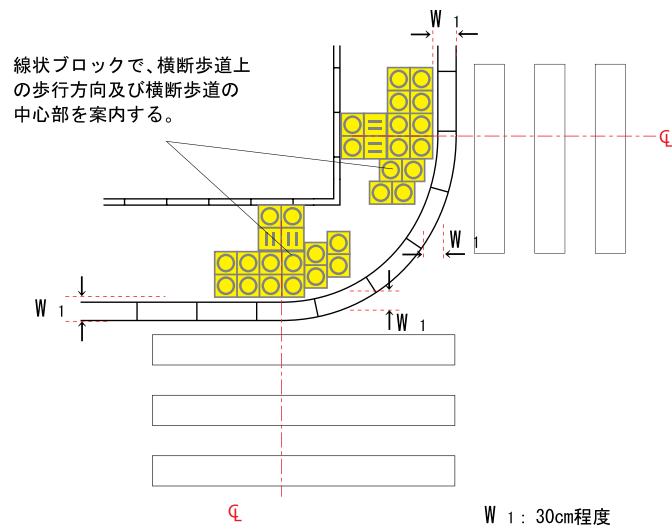
## 2 歩道巻き込み部の設置例

### 基本設置例

2方向に横断が生じる場合



横断歩道が接近している場合

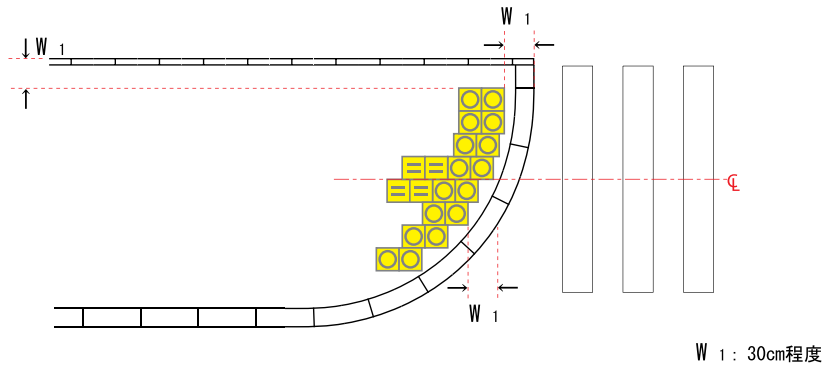


関連法令

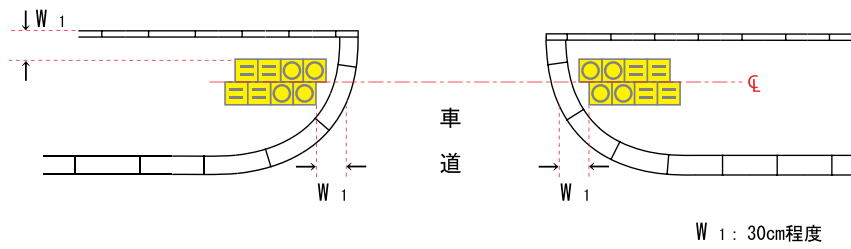
視覚障害者誘導用ブロック設置指針・同解説

## 基本設置例

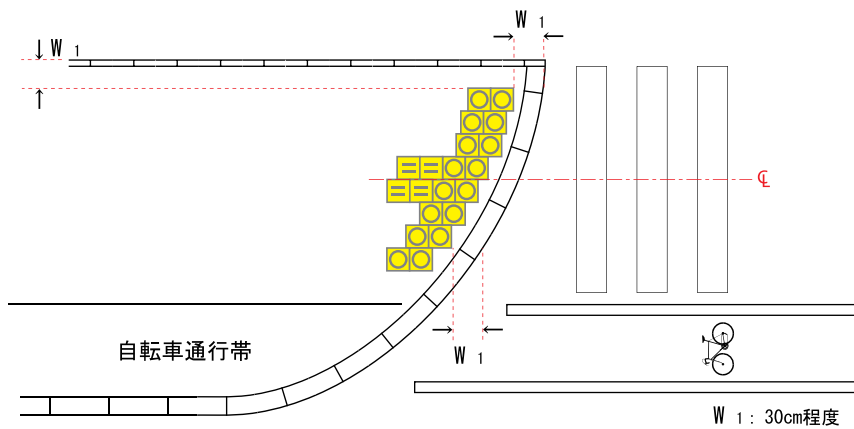
### 歩道幅員が広い場合



### 歩道幅員が狭い場合

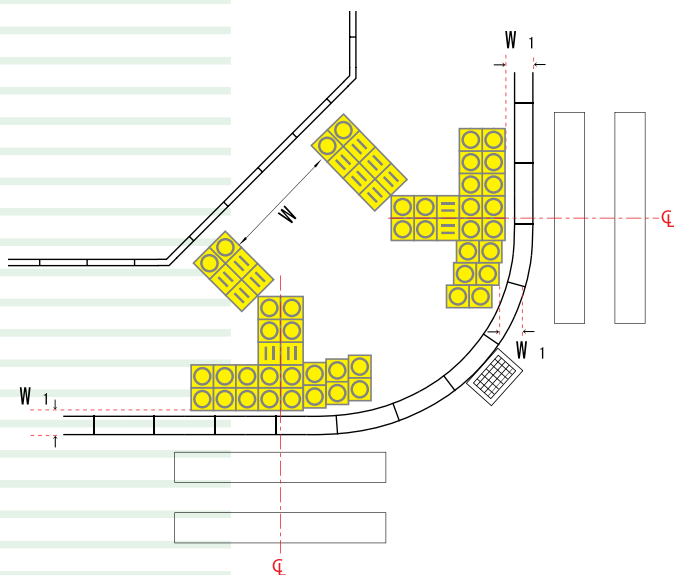


### 自転車通行帯標示がある場合



## 歩道巻き込み部の不定形な設置例

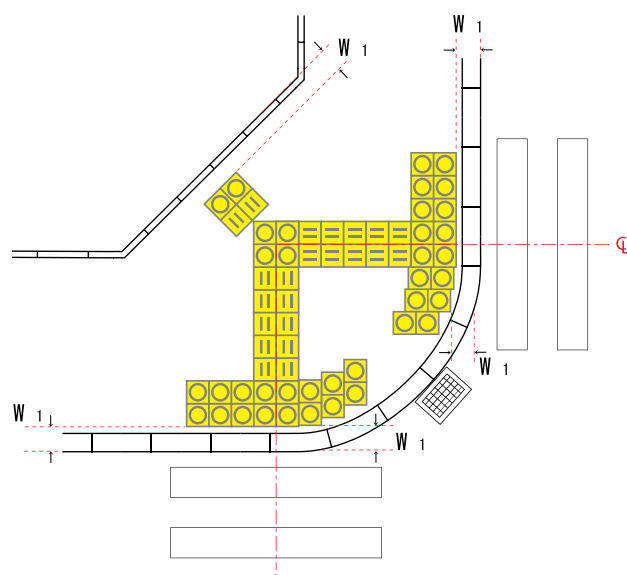
ア 2方向に横断歩道がある場合、基本的には、単独で隅切りに誘導する。しかし、下図のw幅が接近する場合は右記「イ」の設置例による



W : 2m以上確保する W 1: 30cm程度  
ことが望ましい。

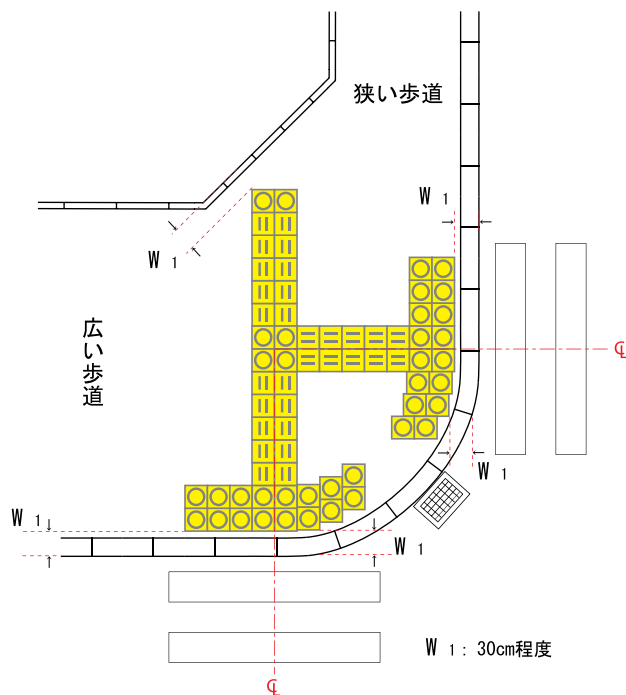
(注意) W幅が接近していると利用者が混乱する。

イ 左記「ア」の図「W」が接近する場合は設置例



W 1: 30cm程度

ウ 狭い歩道と、広い歩道において合流する場合の設置例  
(単独で隅切りに誘導できない場合)

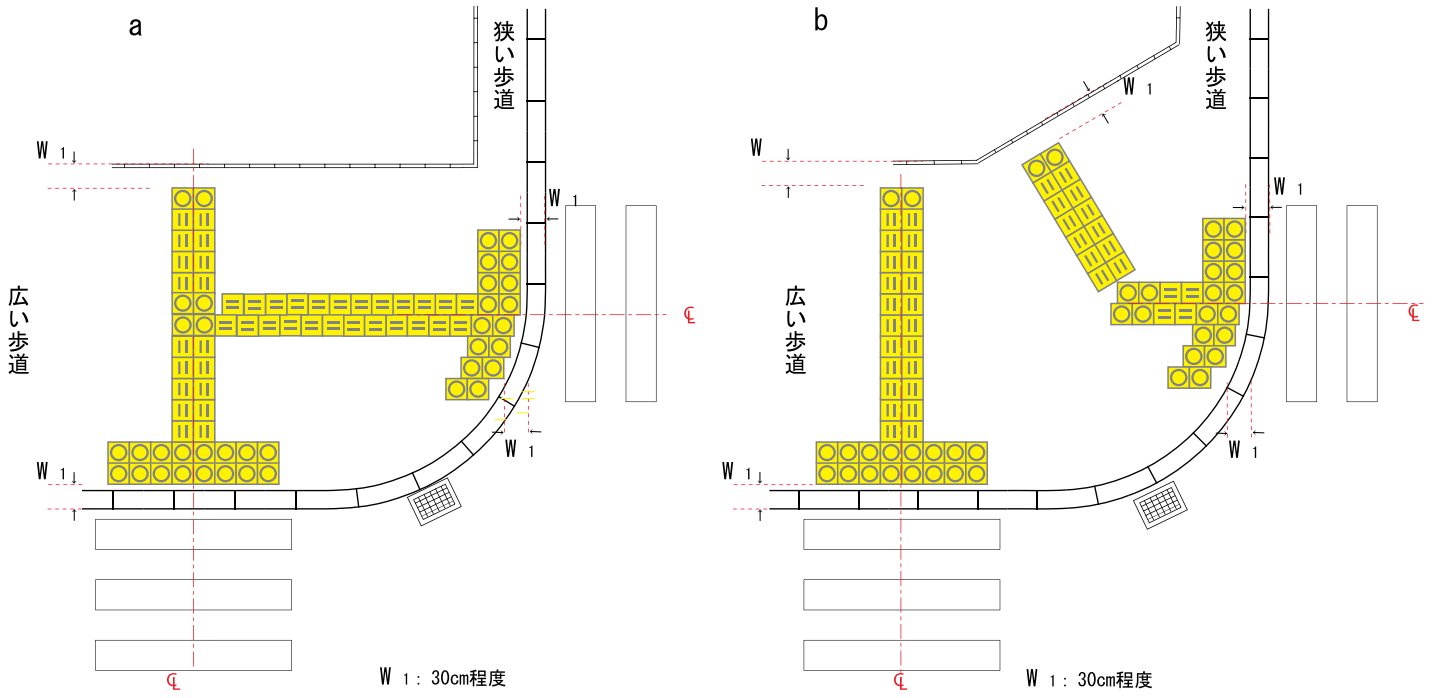


W 1: 30cm程度

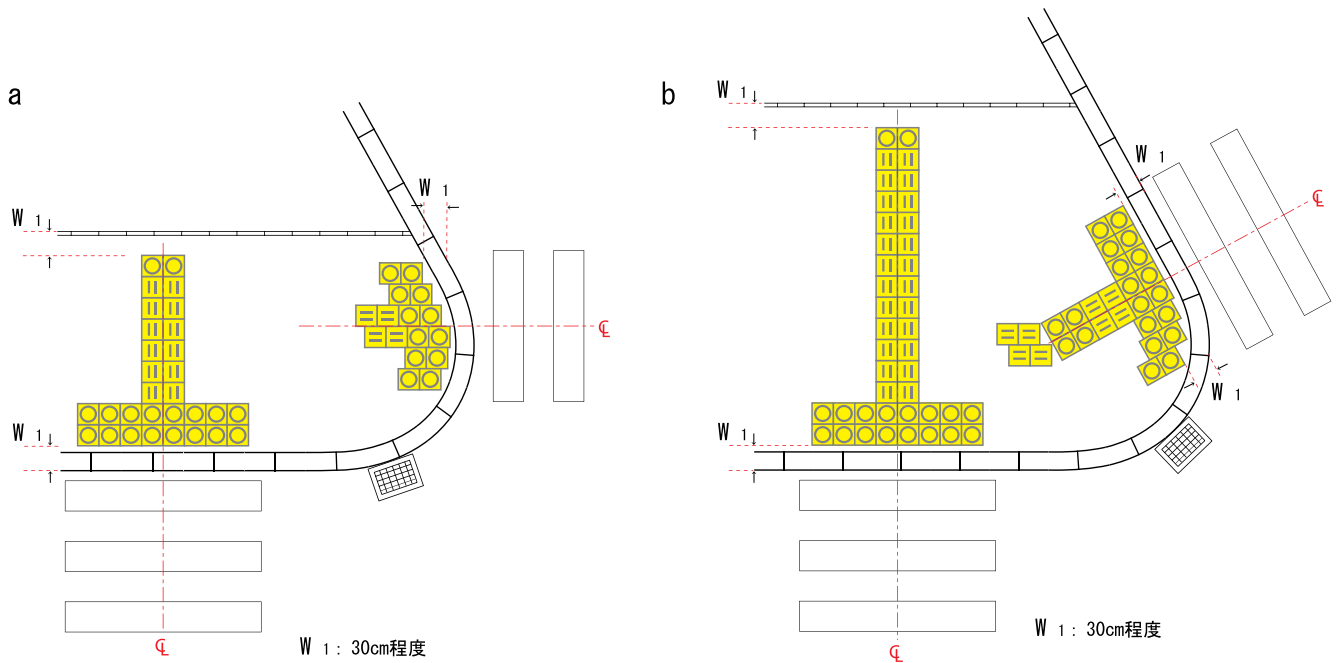
関連法令

視覚障害者誘導用ブロック設置指針・同解説

エ 狭い歩道と広い歩道において合流しない場合の設置例

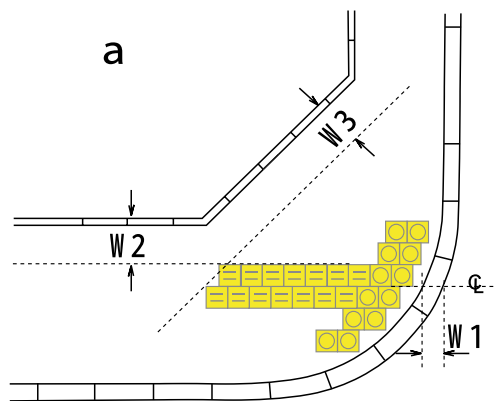


オ 片側歩道で2方向に横断歩道がある場合の設置例

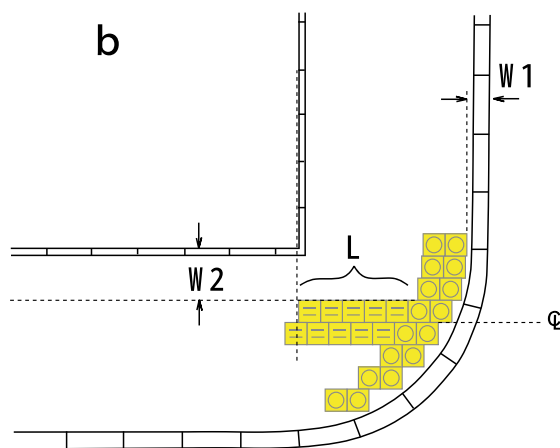




カ 1方向に横断する場合で継続的直線方向の誘導をしない場合の設置例



W 1: 30cm程度  
 W 2: 60cm程度 (広幅員歩道では1m程度)  
 W 3: 60cm程度 (隅切りが大きい場合には1m程度)



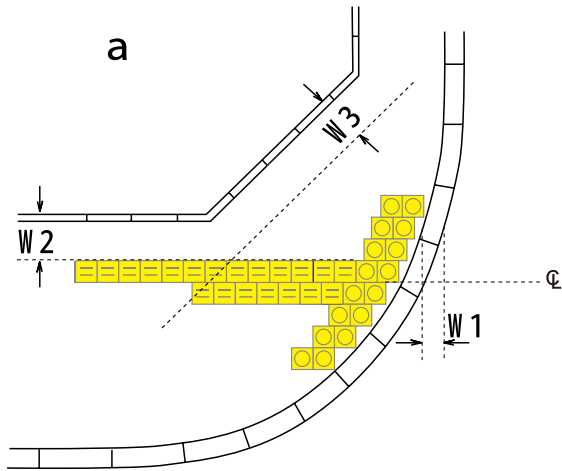
W 1: 30cm程度  
 W 2: 60cm程度 (広幅員歩道では1m程度)  
 L: 最低でも2段は配置する

注. W2については路上施設や占用物件の設置状況などによって、この値とすることが適切でない場合は、この限りでない。

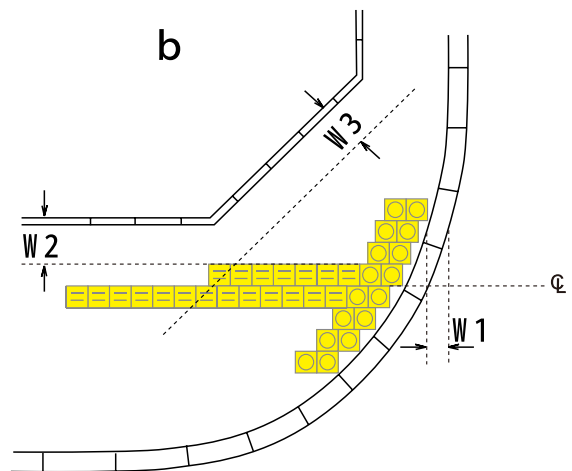
関連法令

視覚障害者誘導用ブロック設置指針・同解説

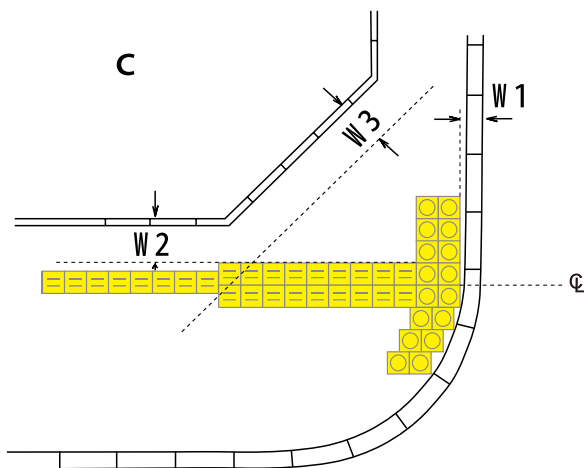
キ 1方向に横断する場合で継続的直線方向の誘導をする場合の設置例



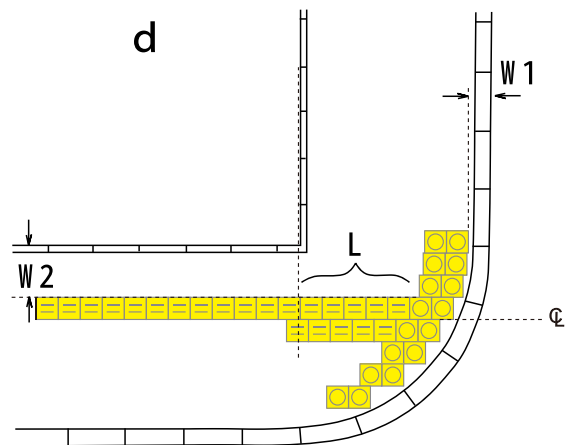
W 1: 30cm程度  
 W 2: 60cm程度 (広幅員歩道では1m程度)  
 W 3: 60cm程度 (隅切りが大きい場合には1m程度)



W 1: 30cm程度  
 W 2: 60cm程度 (広幅員歩道では1m程度)  
 W 3: 60cm程度 (隅切りが大きい場合には1m程度)



W 1: 30cm程度  
 W 2: 60cm程度 (広幅員歩道では1m程度)  
 W 3: 60cm程度 (隅切りが大きい場合には1m程度)



W 1: 30cm程度  
 W 2: 60cm程度 (広幅員歩道では1m程度)  
 L: 最低でも2段は配置する

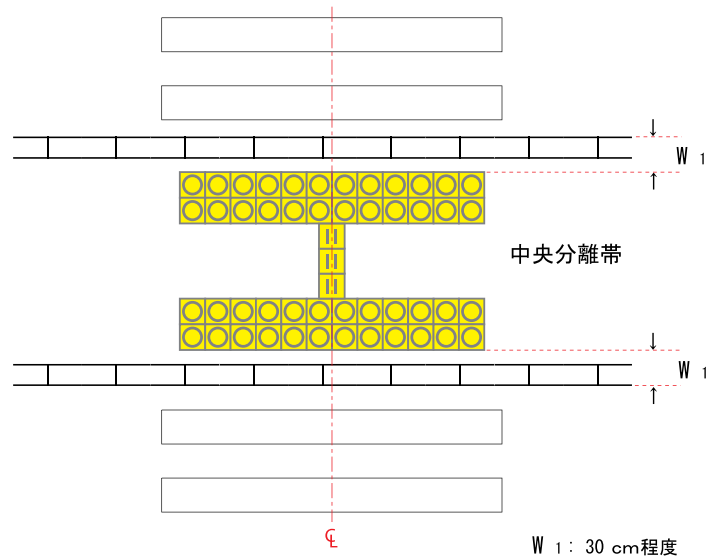
### 3 中央分離帯の設置例

中央分離帯には、横断歩道の幅を示す点状ブロック、歩行方向及び横断歩道の中心部を示す線状ブロックを設置する。

ただし、中央分離帯の高さと車道の高さを同一にする場合は、中央分離帯の中にブロックを設置しないものとする。

#### 基本設置例

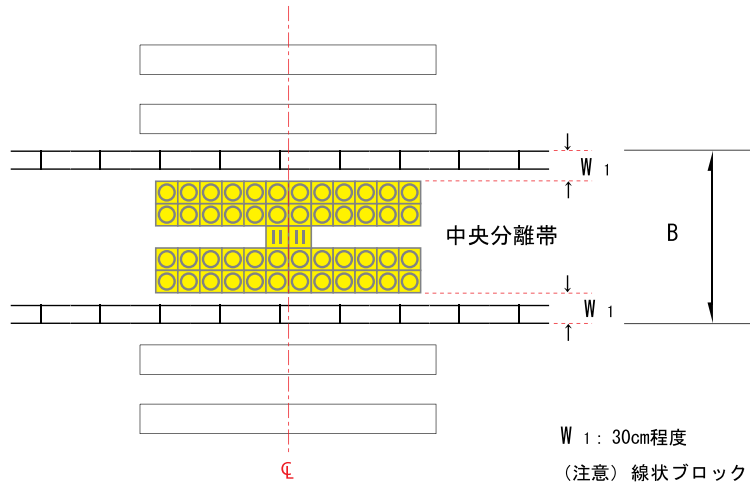
##### 広い中央分離帯の場合



(注意) 線状ブロックが点状ブロック間において、歩行方向に2枚以上設置できる場合は1列で誘導する。

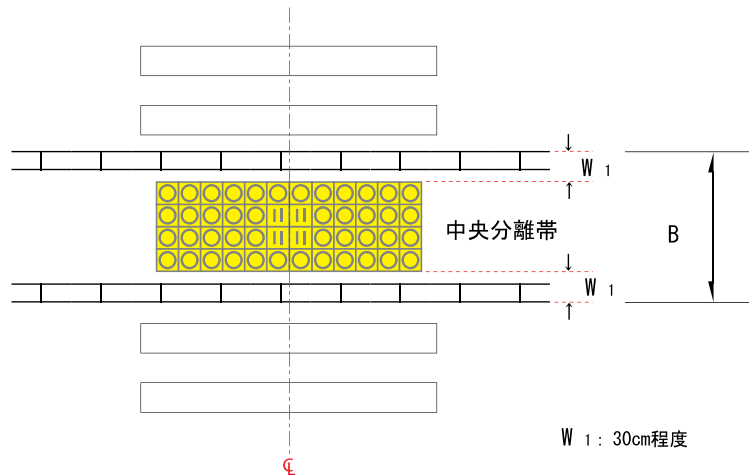
## 中央分離帯の不定形な設置例

### ア 中央分離帯の幅員 $B=2.10\text{m}\sim 2.40\text{m}$ 程度の場合

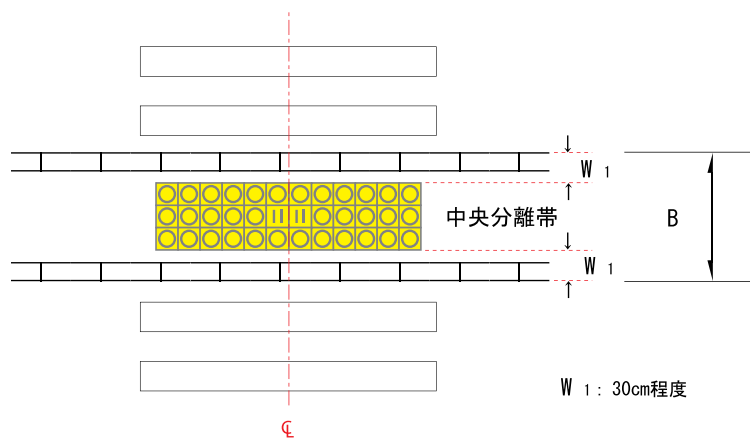


(注意) 線状ブロックが点状ブロック間において歩行方向に1枚しか設置できない場合は、並列2枚で誘導する。

### イ 中央分離帯の幅員 $B=1.80\text{m}\sim 2.10\text{m}$ 程度の場合



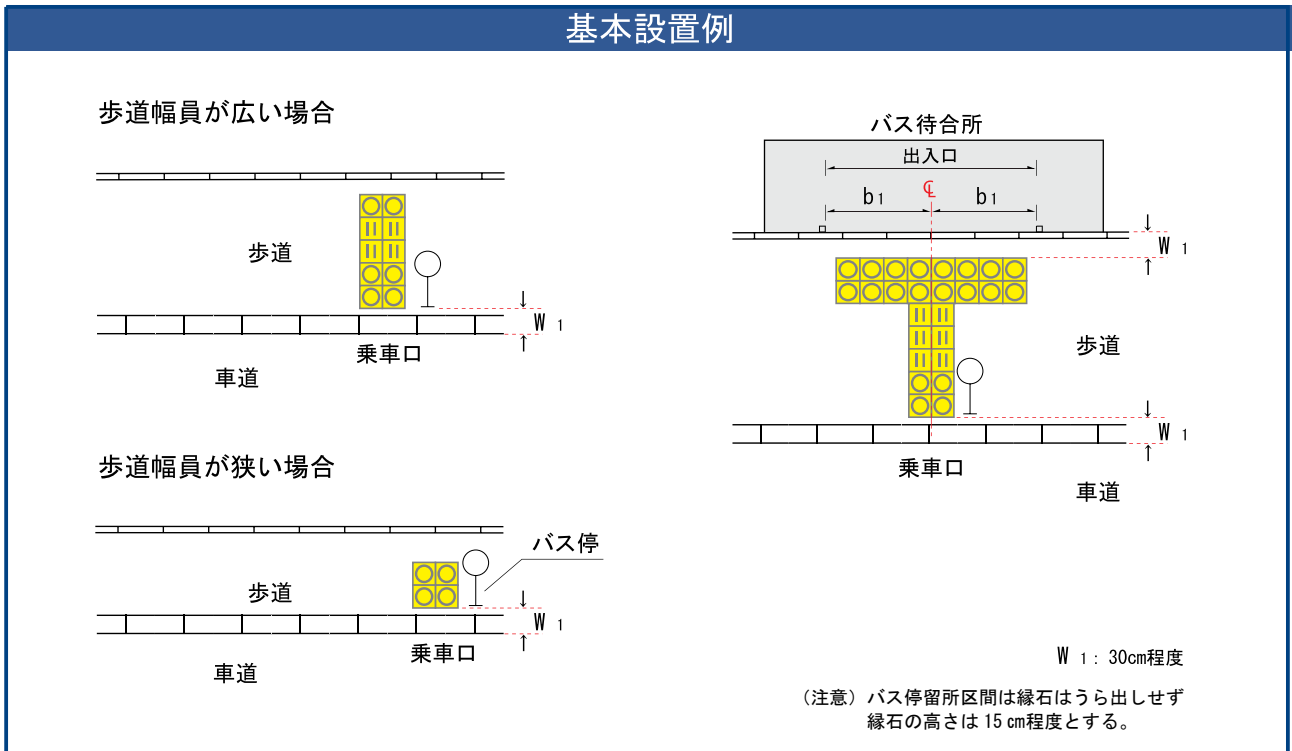
### ウ 中央分離帯の幅員 $B=1.50\text{m}\sim 1.80\text{m}$ 程度の場合



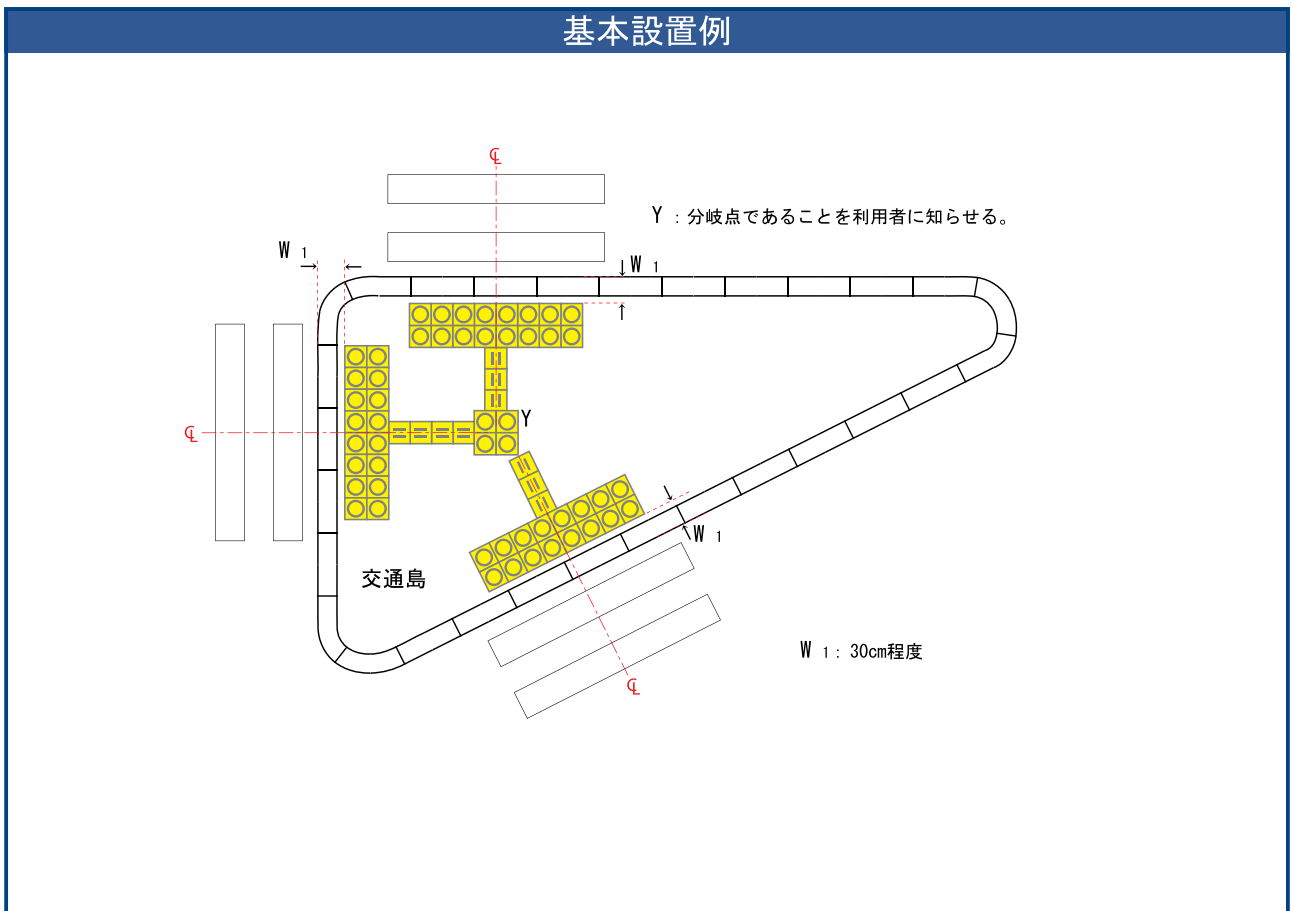
関連法令

視覚障害者誘導用ブロック設置指針・同解説

#### 4 バス停留所の設置例

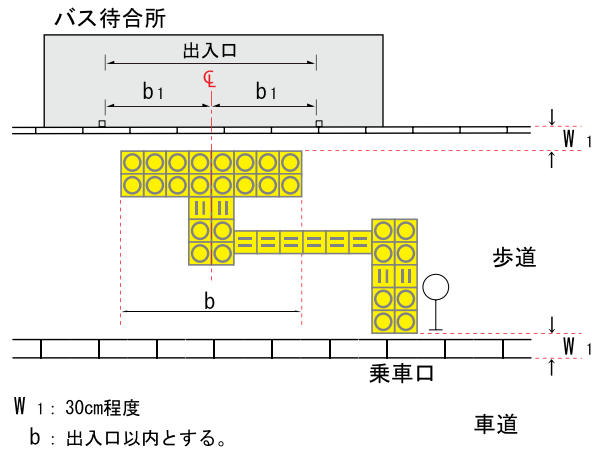


#### 5 交通島の設置例



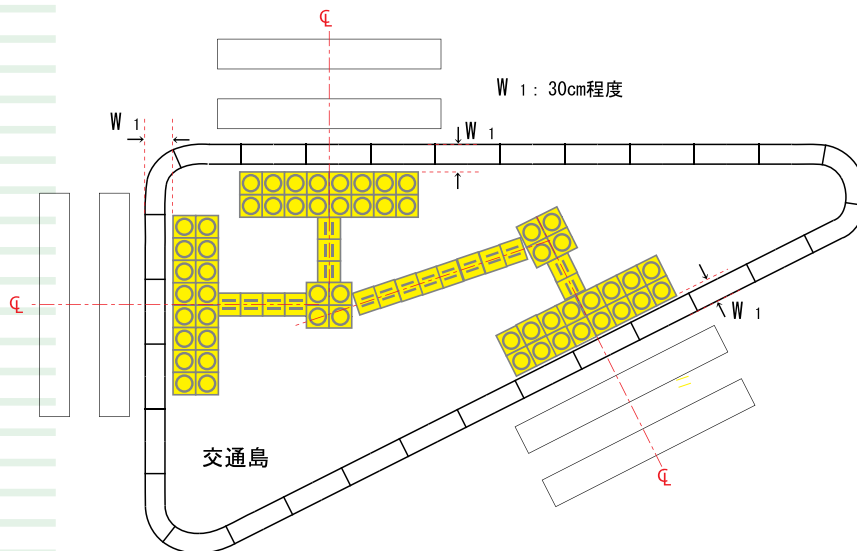
## バス停留所の不定形な設置例

バス乗降口とバス待合所の間を誘導する設置例



## 交通島の不定形な設置例

横断歩道の位置が離れている場合の設置例

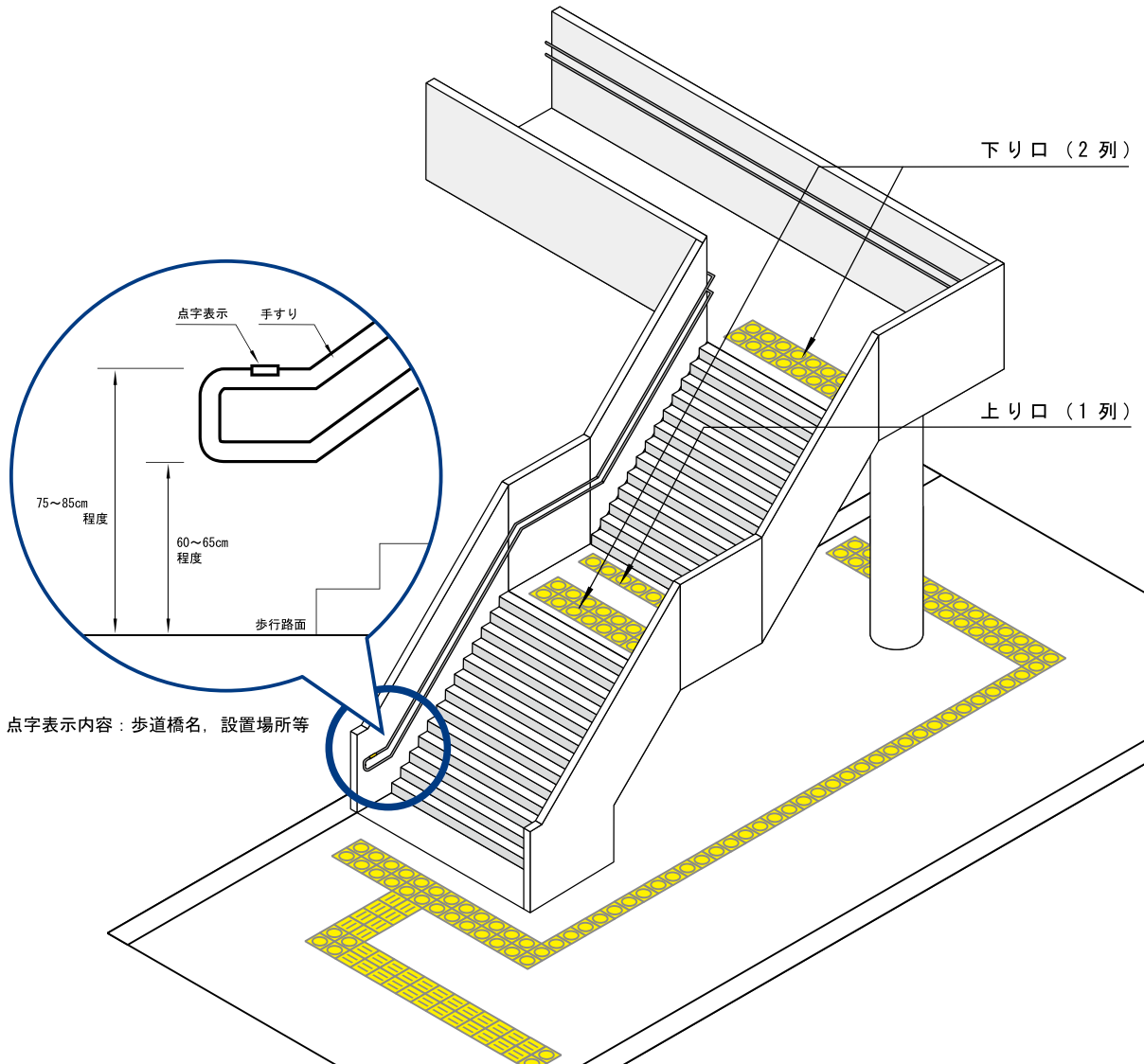


関連法令

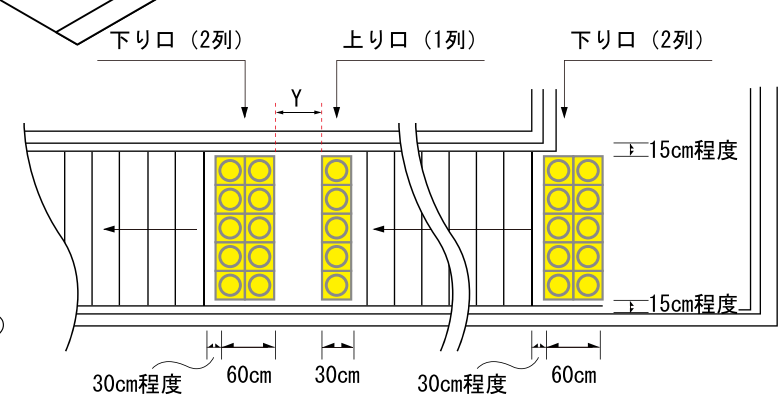
視覚障害者誘導用ブロック設置指針・同解説

6 立体横断施設の設置例

基本設置例



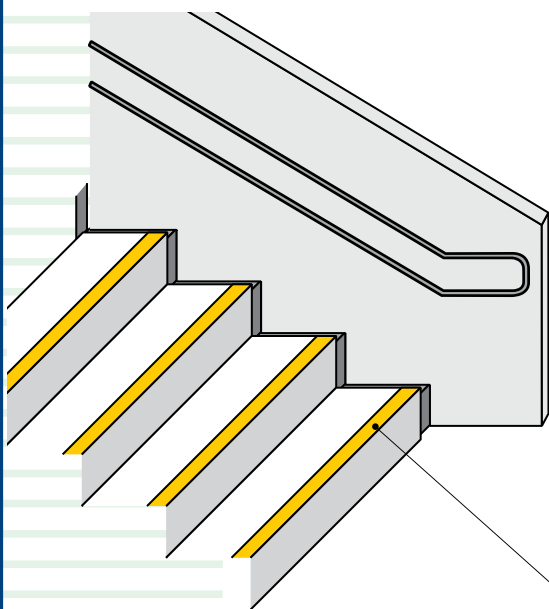
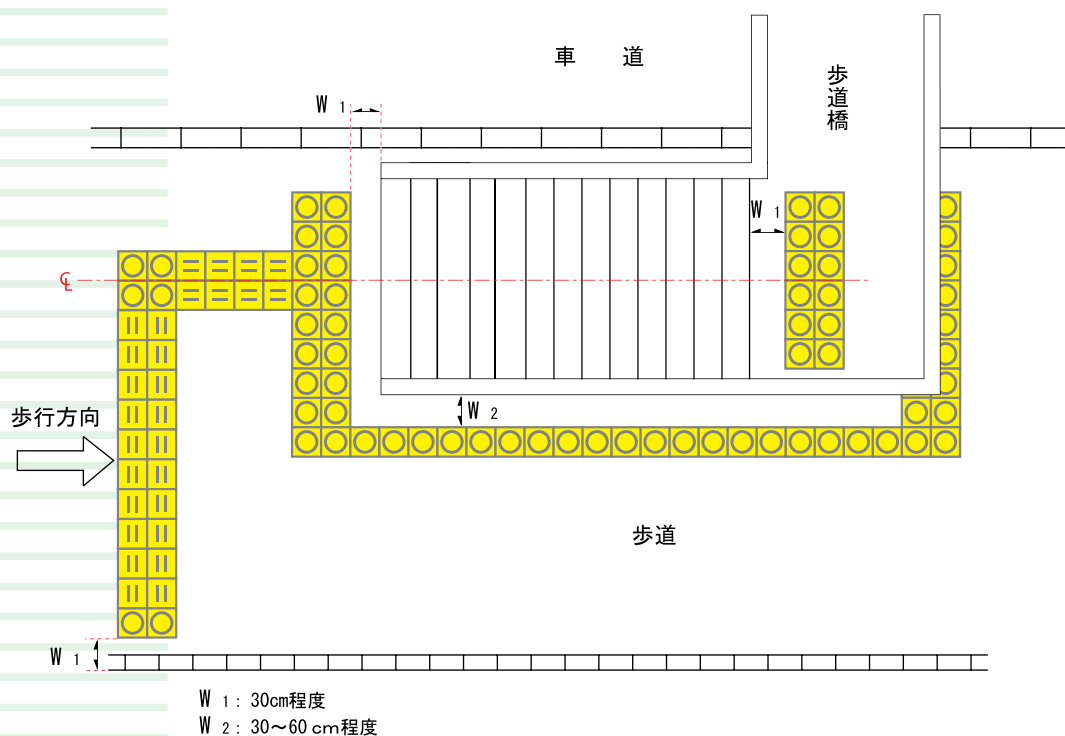
点字表示内容：歩道橋名，設置場所等



(注意) Y については、50cm以上確保する。  
ただし、確保できない場合は、上り口を省略してよい。(下り口は2列配置とする。)

## 6 立体横断施設の設置例

### 基本設置例



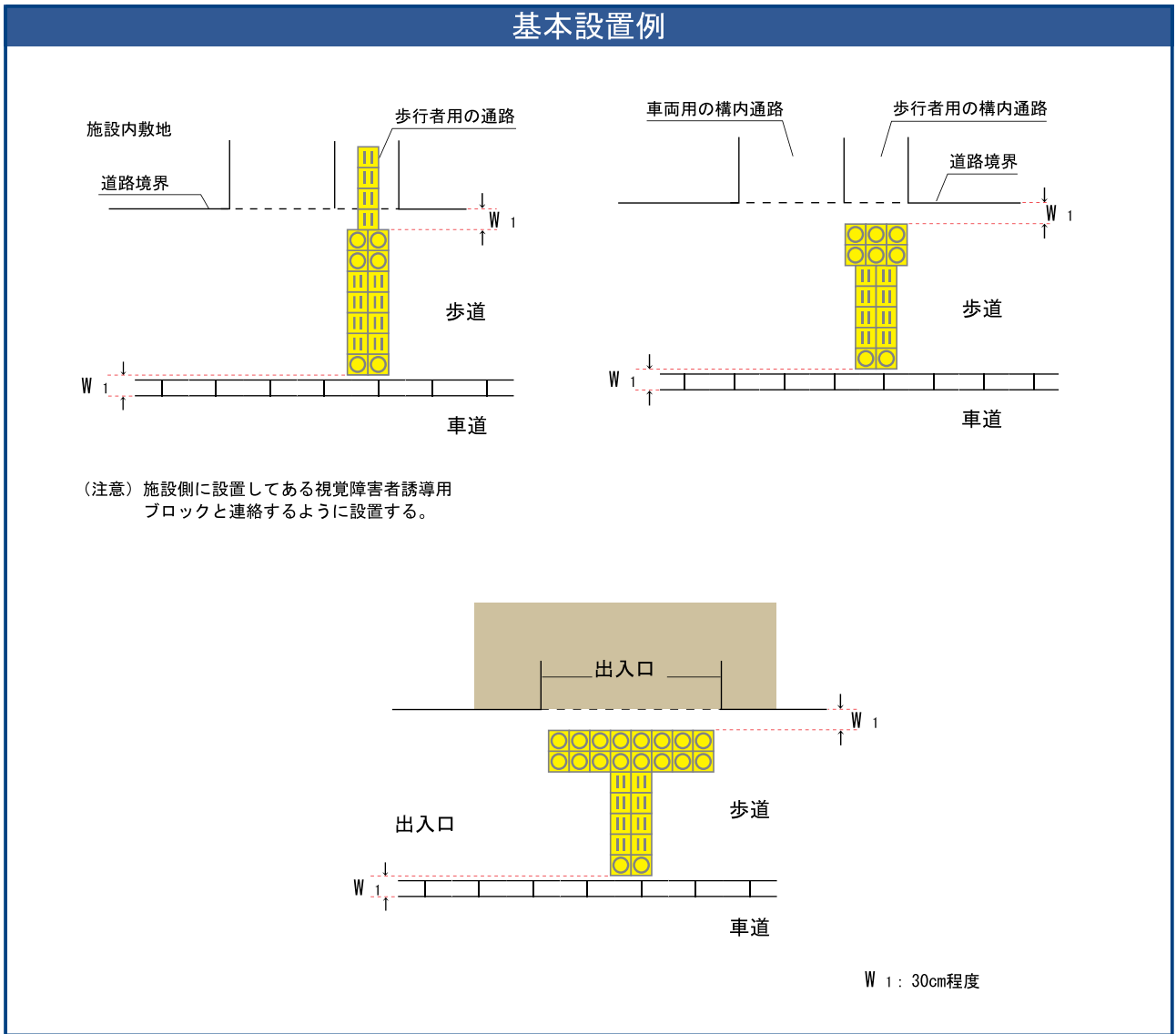
階段：ノンスリップは明度差の大きい色で識別しやすくする。(黄色)

#### 関連法令

視覚障害者誘導用ブロック設置指針・同解説

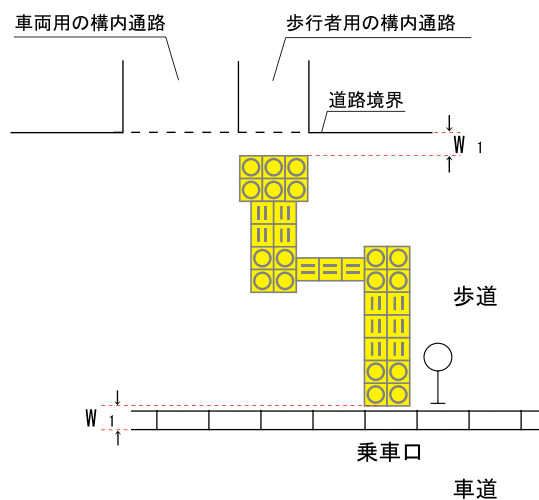


## 7 施設等入口部の設置例



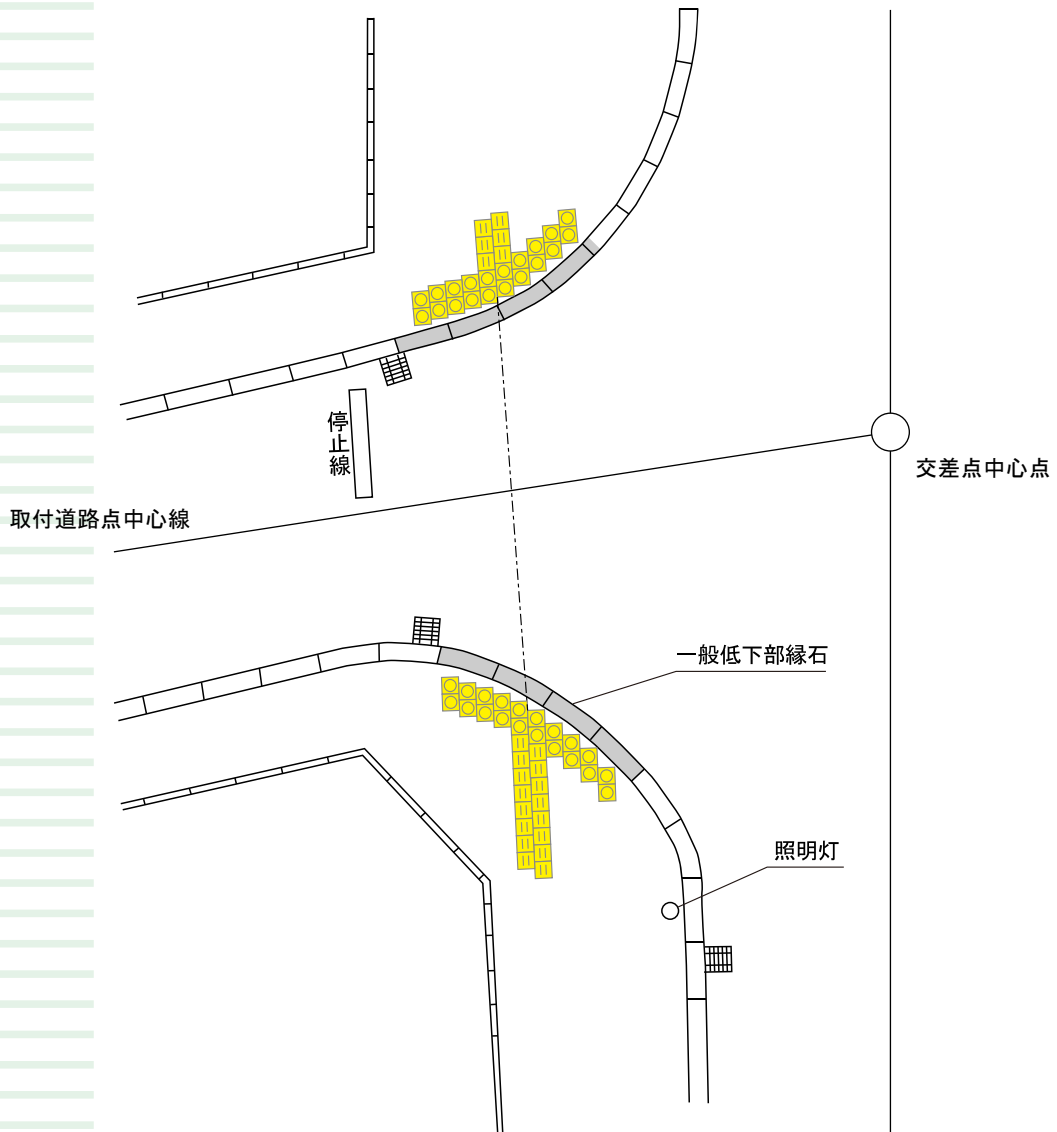
### 施設等入口の不定形な設置例

施設等入口部からバス停部までの間を誘導する設置例



(注意) バス停、タクシー乗車口には点状ブロック4枚設置する。

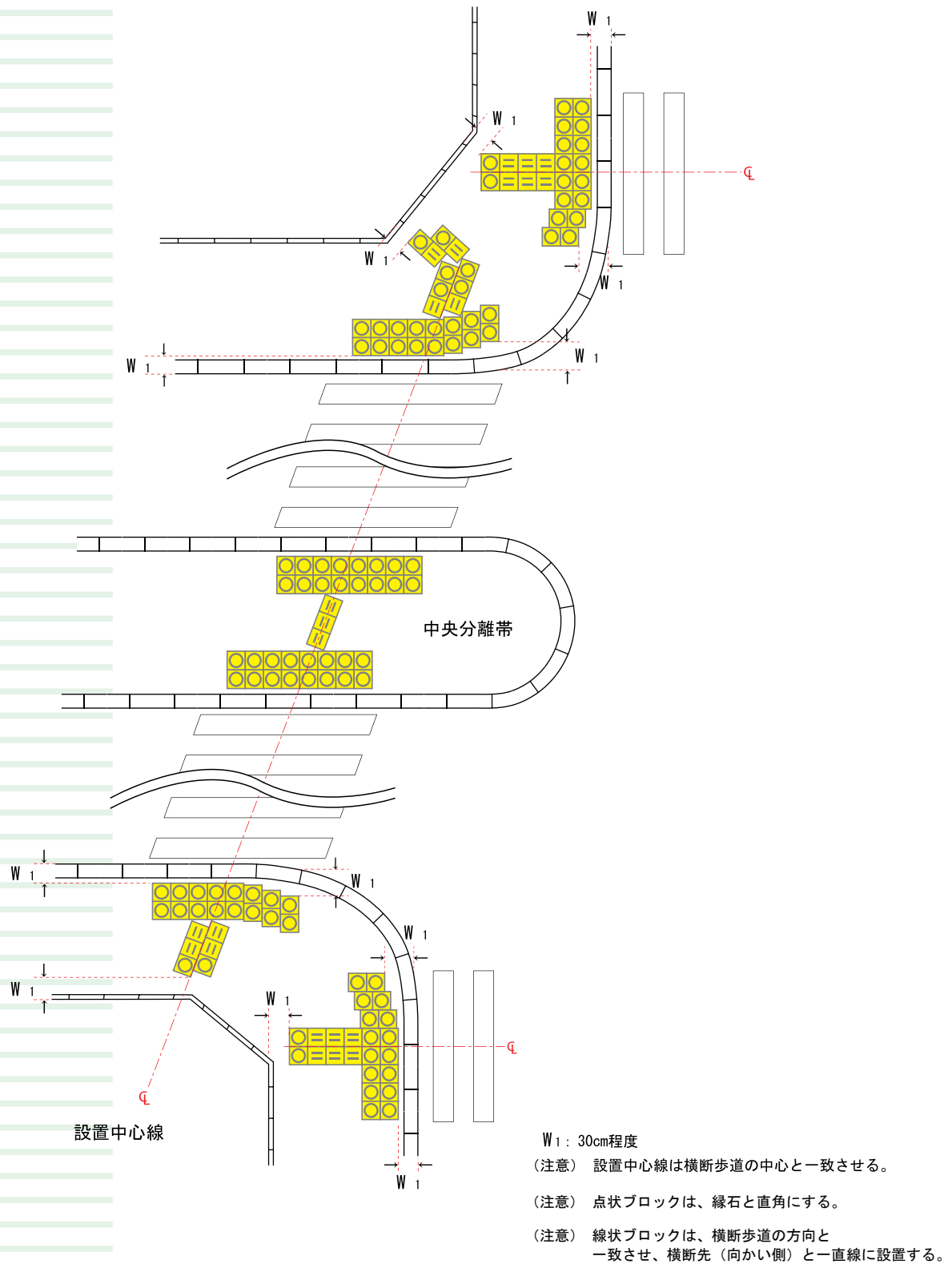
## 8 取付道路に停止線があり、横断歩道がない場合の点状ブロックの設置例



■点状ブロックは、交差する道路（取付道路）の停止線よりも交差点中心点側に設置する。

## 8 その他の不定形な設置例

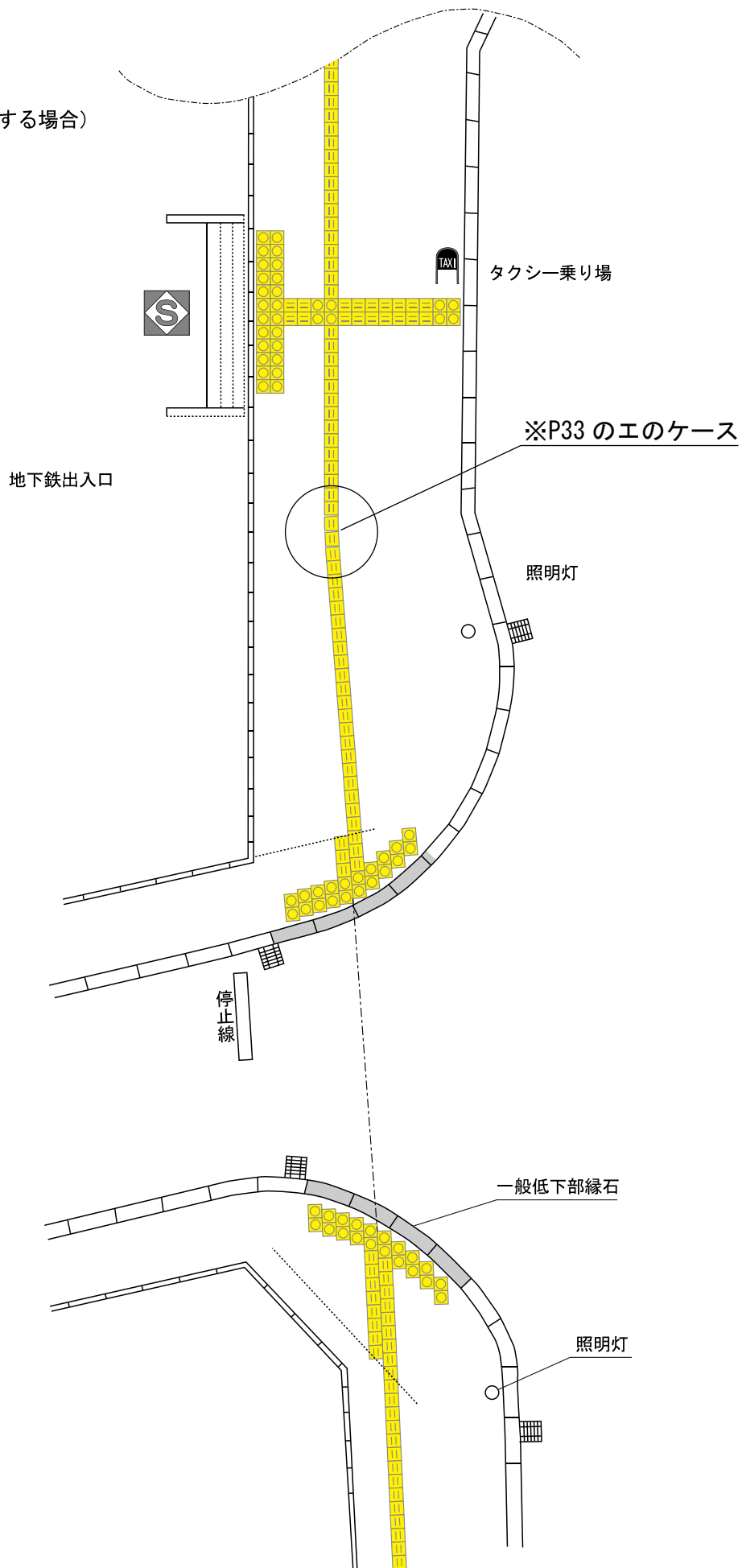
### ア 中央分離帯のある変則交差点の設置例



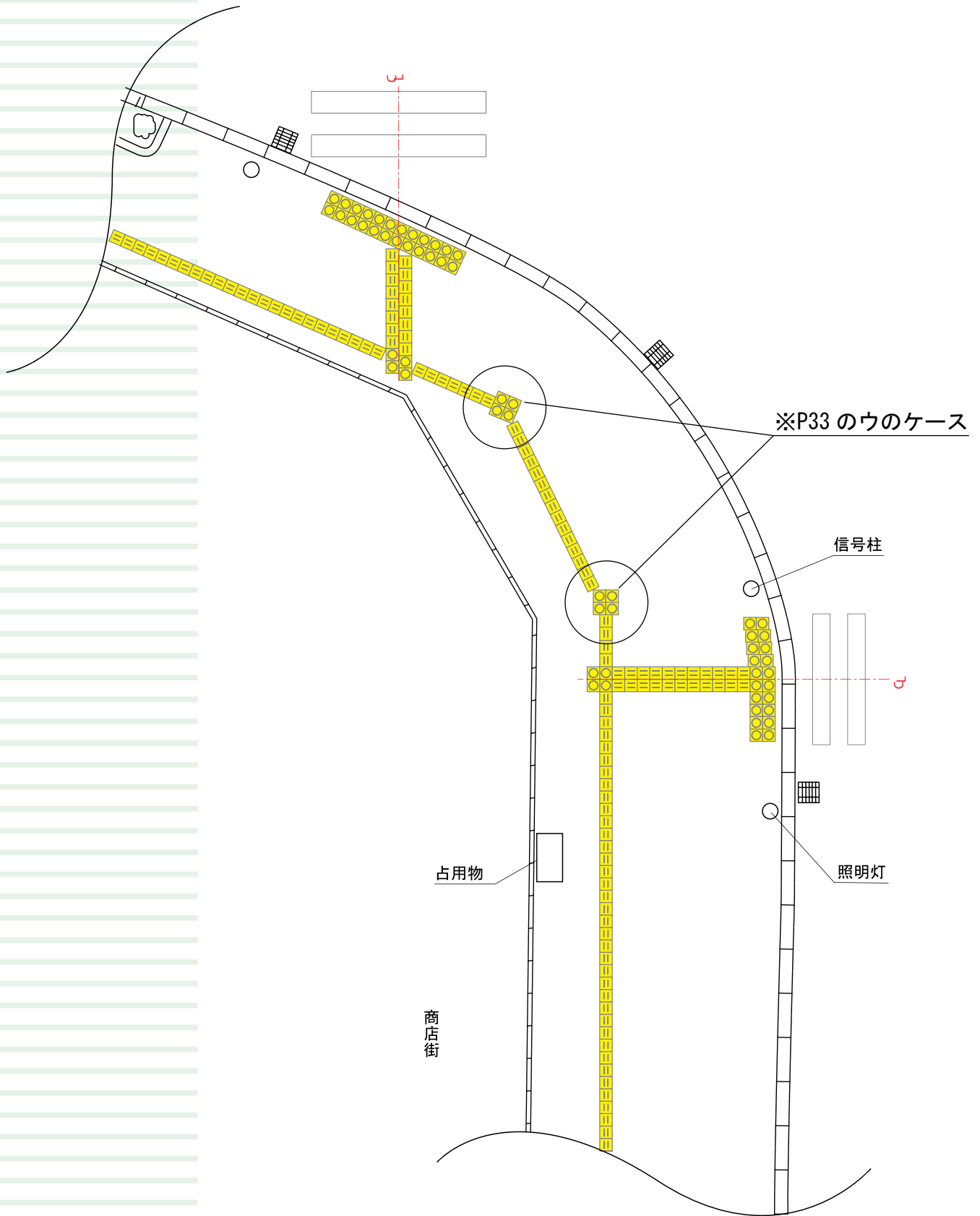
関連法令

視覚障害者誘導用ブロック設置指針・同解説

イ 地下鉄出入口の設置例  
(継続的歩行経路を案内する場合)



ウ 交差点周辺の設置例 (継続的歩行経路を案内した場合)



関連法令

視覚障害者誘導用ブロック設置指針・同解説